

和鋼博物館展示改修 基本構想・基本計画



令和6年3月

目次

第1章 展示改修基本構想の背景	5
(1) 展示改修基本構想・基本計画策定の経緯	6
(2) 構想の位置付け	7
(3) 策定体制	8
(4) 計画期間	8
(5) 博物館を取り巻く状況	9
ア 博物館法の改正、博物館の在り方	9
イ 日本遺産と文化観光	10
ウ 人材育成	10
(6) 安来市の歴史的・文化的特徴	11
ア 立地（位置や面積など）	11
イ 沿革	12
ウ 地名の由来と市名選定の理由	12
エ 交通（道路・公共交通機関・アクセスなど）	13
オ 人口	14
カ 特産品・名物	15
キ 安来市名誉市民	17
ク ご当地キャラクター	20
ケ 市内の関連施設、遺跡	20
(7) 和鋼博物館の概要	22
ア 設立の経緯	22
イ テーマであるたたら製鉄について	22
ウ 沿革と鉄の道文化圏推進協議会	23
エ 日本遺産「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」	24
オ 開館当時の和鋼博物館の役割	26
カ 所在地と建築概要	27
キ 利用者（入館者数推移など）	27
ク 施設構成	28
ケ 展示構成	32
コ 事業内容	32
サ 関係諸機関	33
(8) 和鋼博物館の現状と課題	34
ア 現状	34
イ 課題	39
(9) 今後強化する取組	42
第2章 展示改修基本構想	45
(1) 新和鋼博物館の基本理念	46
(2) 新和鋼博物館の果たすべき役割	46
(3) 新たな展示の5本柱	48

第3章 展示改修基本計画	51
(1) 展示計画	53
ア 展示の基本的な考え	53
イ 展示解説の考え	53
ウ 展示構成	54
(2) 管理運営計画	72
ア 管理運営形態	72
イ 組織体制	72
ウ 開館時間・休館日	73
エ 入館料	73
(3) 事業推進計画	74
整備スケジュール	74
参考資料 基本構想・基本計画取りまとめの流れ	75
施設の現況写真	77

用語解説

●たたら

たたらという言葉は古くから見られ、その語源は明らかでないが、古代には送風機であるふいご、中世には製鉄炉、近世には作業建屋を指した。16世紀には製鉄に関わる施設あるいはそれを含む一定の範囲を指してたたらと呼んだ。現在は一般に、製鉄技術、製鉄施設、製鉄施設を含む一定の範囲をたたらと呼んでいる。

冶金学者の俵田一博士は、砂鉄を原料とする古来の砂鉄製錬法を「たたら吹製鉄法」とした。俵博士がいうたたら吹製鉄法とは、作業建屋の高殿内で、土製の製鉄炉に砂鉄と木炭を装入し、鞴で送風して鉄をつくる鉄生産の仕組みを指している。

●和鋼

たたら製鉄で生産された鋼。明治期に洋式製鉄法による鋼が洋鋼と称された事に対する名称と考えられる。

●鉄の分類

鉄は含まれる炭素の量によって性質が大きく変化し、用途も変わる。冶金学では炭素量により、0.02%以下を鉄、2.1%以上を銑鉄、その中間を鋼と大別している。一般に炭素量が増えるほど硬く、かつもろくなりやすい性質がある。

鉄（純鉄）は非常に軟らかいので、特殊な用途に限られる。銑鉄はほとんどが鋼を製造するための原料となるが、溶けやすいため、鋳物としても用いられる。鋼は、鍛錬や熱処理によって、粘りや硬さを負荷したり、色々な形状に成形できるため、用途は非常に広い。

●ハガネの町

明治時代後期に洋式製鉄が主流となり、たたら製鉄が衰退すると、出雲、伯耆地方のたたら経営者たちは製鉄業の近代組織化を図り、安来に鉄鋼会社を設立。たたら製鉄の伝統技術を近代製鋼技術へと発展させ、製品の高品質化に成功し、安来は高機能特殊鋼「ヤスキハガネ」を生産する町へと移り変わり、「ハガネの町」と称されるに至る。

第1章

.....
展示改修基本構想の背景
.....

(1) 展示改修基本構想・基本計画策定の経緯

和鋼博物館は、平成5（1993）年に開館し、たたら製鉄の歴史と技、そしてハガネの町安来の成り立ちを伝える、安来の象徴的な文化施設です。平成28（2016）年に「出雲國たたら風土記」が日本遺産の認定を受けてからは、日本遺産の拠点、文化観光の拠点という新たな要素も加わり、益々注目を集めています。

しかし、開館30年を迎え、建物及び設備の老朽化や、展示内容・展示手法の更新など様々な課題も抱えており、金屋子神話民俗館の閉館（令和4（2022）年）に伴うその役割の継承も併せ、情勢に応じた機能強化を早急に図る必要があります。また、博物館を取り巻く状況として、学びや楽しみを提供する施設という従来の役割に加え、日本遺産のゲートウェイ機能、生涯学習支援、市民協働、賑わい創出、市民や観光客など多様な人々の集い、交流の拠点といった役割も求められています。

そこで、これらの課題を解決し、さらなる魅力の向上や利用者満足度の向上を図る大規模な展示改修を実施するために、コンセプトや必要機能を取りまとめた和鋼博物館展示改修基本構想・基本計画（以下、基本構想）を策定します。

なお、基本構想の和鋼博物館における対象エリアは、エントランスホール、映像ホール、前室、展示室1、展示室2、展示室3、俵記念室、2階ロビー、展望ラウンジです。

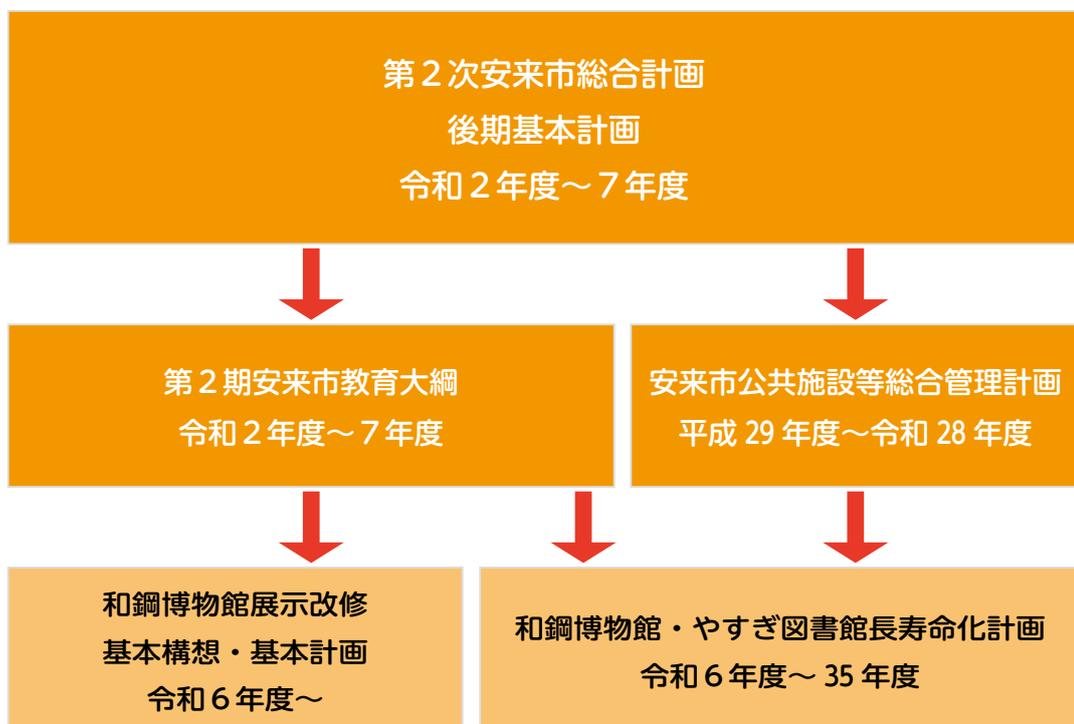


図1-1 たたらの炉と天秤轆

(2) 構想の位置付け

本構想は国が定めた「文化財保護法」、「博物館法」、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」などを前提として、本市の行財政運営の指針である「安来市総合計画」、教育行政の指針である「安来市教育大綱」を上位計画とした個別計画であり、本構想で目指す理念の実現のために、取り組んでいきます。

また、建物設備面においては、令和5（2023）年度策定の長寿命化計画に従い、隣接するやすぎ図書館と合わせて、建物設備の長寿命化と充実化を推進し、博物館機能の維持・回復と強化を図ります。



(3) 策定体制

本事業は、事務局を安来市教育委員会文化課が担い、以下の体制で行う。



(4) 計画期間

本構想の計画期間の始期は令和6（2024）年度、終期は定めないものとし、博物館を取り巻く環境の変化に応じて、適宜見直しを図ります。

なお、建物設備の改修と共に、令和6（2024）年度から9（2027）年度までを集中取組み期間とします。

(5) 博物館を取り巻く状況

平成5（1993）年の開館以降、博物館を取り巻く状況は大きく変化し、安来市をはじめ日本、世界全体においても、新たな社会課題が生じてきました。従来の取組を基本としながらも、新たな状況に対応しながら社会的役割を果たしていく博物館を目指します。

ア 博物館法の改正、博物館の在り方

博物館の機能・役割が多様・高度化している現状に応じて、令和4（2022）年に博物館法が改正され、法律の目的、博物館の事業、博物館の連携などについて、見直しなどが行われました。

また、令和3（2021）年の文化審議会から文部科学大臣への答申「博物館制度の今後の在り方」において、「これからの時代にふさわしい博物館の在り方」が示されました。

これらも参考にして、和鋼博物館の在り方を検討していきます。

II これからの時代にふさわしい博物館の在り方

● 博物館法制定時からの3つの基本的な使命

・資料の①収集・保管、②展示・教育、③調査・研究

→ 現在においても、ICOMなど国際的に共有されているものであり、引き続き維持する必要

● 博物館に求められる役割・機能の多様化・高度化

・文化施設としての役割の明確化、まちづくり・国際交流、観光・産業、福祉等の関連機関との連携（文化芸術基本法）

・文化財をまちづくりに活かすなど、地域文化財の計画的な保存・活用の促進を図る機関としての役割（文化財保護法）

・博物館の文化資源を活用する文化観光拠点施設としての役割（文化観光推進法）

● 今後必要とされる役割・機能：

・「文化をつなぐミュージアム」（Museum as Cultural Hub ※ICOM京都大会で提唱）としての地域のまちづくりや産業活性化、社会包摂、人口減少・過疎化・高齢化、地球温暖化やSDGsなど社会的・地域的課題と向き合うための場

・実物（もの）に触れる感動など、文化芸術や自然科学の気付きや発見の共有の場

・デジタル技術等を活用した新しい鑑賞・体験モデルの構築、文化資源の魅力の発信の場



<これからの博物館に求められる役割・機能（5つの方向性）>

「守り、受け継ぐ」 資料の保護と文化の保存・継承

「わかち合う」 資料の展示、情報の発信と文化の共有

「育む」 多世代への学びの提供

「つなぐ、向き合う」 社会や地域の課題への対応

「営む」 専門人材の確保、持続可能な活動と経営の改善向上

図1-2 これからの時代にふさわしい博物館の在り方

引用：文化庁 HP「博物館法制度の今後の在り方について（審議のまとめ）」

イ 日本遺産と文化観光

平成28(2016)年に、安来市、雲南市、奥出雲町に伝わるたたら製鉄の文化遺産は「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」として、日本遺産に認定されました。日本遺産は文化材を面で繋ぎ、保存するだけでなく活用面を重視し、観光への利用を図るものです。2市1町は、和鋼博物館、雲南市の菅谷たたら山内、奥出雲町の奥出雲たたらと刀剣館の3施設を、日本遺産ゲートウェイ施設と位置付け、日本遺産ストーリーの紹介、日本遺産を知り楽しむコンテンツの情報提供、周遊、宿泊などの観光情報の提供などを行うものとしています。

また、令和2(2020)年に施行された文化観光推進法では、文化の振興を、観光の振興と地域の活性化に繋げ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出することが図られています。

このように、和鋼博物館は日本遺産ゲートウェイ施設、文化観光の拠点として、たたら製鉄の文化遺産を、観光振興と地域の活性化という観点から一層活用することが求められています。

□文化観光とは

有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて、文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう（文観光推進法第2条）

ウ 人材育成

平成30(2018)年に、島根大学が中心となって「先端金属素材グローバル拠点の創出－Next Generation TATARA Project－」が発足しました。このプロジェクトは、たたら製鉄の伝統が息づく島根で、県内の特殊鋼産業と島根大学が、それぞれの蓄積した知見を相乗的に発展させて、新材料の研究開発を行うもので、これらの研究開発を通して若者に魅力ある進学・就業の場を作り、地方創生を推進するものです。島根大学の次世代たたら共創センター「NEXTA」が、プロジェクトの研究・教育を中心的に行う共同研究所の役割を担っています。そして、県内の産業、学界、行政、金融界の協働と国内外の研究機関との連携により「先端金属素材の中心・島根」の創出を目指しています。

和鋼博物館は古代たたら復元操業や日本刀の科学的研究、学芸員養成など、様々な事業で島根大学と連携してきました。この島根大学のプロジェクトでは、和鋼博物館には人材育成などでの連携が期待されています。

また近年は、理系離れと言われる社会状況で、将来に向けた理工系人材の戦略的育成の重要性が再認識されており、文部科学省が理工系人材を育成する大学や高等専門学校を支援するなど、国を挙げた理工系人材の育成が図られています。

一方安来市では、少子高齢化と過疎化の進行もあって、地域の主要産業である特殊鋼産業において、人手不足が生じています。

こうした状況において、和鋼博物館には、博物館活動を通して、技術や科学のおもしろさや魅力に触れ、理工系分野への興味関心を持ってもらう場としての可能性があり、島根大学のプロジェクトやNEXTA、県内特殊鋼企業とともに、人材育成という社会課題に取り組むことができると考えます。

引用：島根大学次世代たたら共創センター HP

(6) 安来市の歴史的・文化的特徴

ア 立地（位置や面積など）

安来市は、島根県の東部、鳥取県との県境に位置し、東は米子市・南部町、南は日南町（以上鳥取県）・奥出雲町、西は松江市・雲南市に接しています。

市域は、東西およそ 22km、南北およそ 28km、面積は 420.93km²です。

南部は、中国山地に連なる豊かな緑に覆われ、そこを源流として中海にそそぐ飯梨川・伯太川全流域が市域に含まれます。下流域に形成された三角州には、広大な耕地が広がり、上流域には豊かな森林と県東部の水瓶としての機能を果たす布部ダム・山佐ダムがあります。

引用：安来市 HP 統計データ情報・安来市の概要 総務部総務課



図 1-3 安来市の立地

イ 沿革

当地域は、古くは出雲国の東部「意宇郡」に属していましたが、平安時代に仁多郡に属していた比田地域と合わさり「能義郡」として一つの行政区となりました。

戦国時代には、月山富田城を本拠とする尼子氏が、山陰山陽八か国の守護に任ぜられるほどの勢力を誇りました。

江戸時代になり、松江藩の支藩として広瀬藩、母里藩が置かれると、飯梨川や伯太川を利用して物資が運搬され、安来港は和鉄や蔵米の集散地（生産地から産物を集めて消費地へ送り出す所）として発展しました。

明治4（1871）年7月、廃藩置県により松江県、廣瀬県、母里県となり、同年11月に統廃合され「島根県」となりました。

明治22（1889）年には、市制町村制施行により、能義郡として2町14村となりました。

その後、戦後の市町村合併により「安来市」「広瀬町」「伯太町」の1市2町となり、圏域市町として生活・文化など連携した政策を行いながら、平成16（2004）年10月1日、新生「安来市」として合併し、今日に至ります。

引用：安来市 HP 統計データ情報・安来市の概要 総務部総務課

ウ 地名の由来と市名選定の理由

神代の昔、スサノオノミコトがこの地に来られ「吾が御心は安平けくなりぬ」と言われたことから「安来」というようになったと伝えられています（「出雲国風土記」から）。そして、安来節・ヤスキハガネは全国的、世界的に高い知名度があります。こうした歴史・文化・産業にちなんだ地名を大切な資産として新市の名称として選定されました。

引用：安来市 HP 統計データ情報・安来市の概要 総務部総務課



図1-4 安来市役所安来庁舎

エ 交通（道路・公共交通機関・アクセスなど）

本市には、西日本旅客鉄道（JR 西日本）山陰本線の安来駅、荒島駅の2駅が設置されています。安来駅には、山陰本線特急の「スーパーおき」「スーパーまつかぜ」「やくも」、寝台特急「サンライズ出雲」、観光列車「あめつち」がそれぞれ停車します。

市域を通る幹線道路には、山陰自動車道、国道9号、国道432号があり、安来中海沿岸地域から米子市、松江市、出雲市などの近隣都市へのアクセスも良好です。

また、空路は米子空港（米子鬼太郎空港）から、JR 西日本境線と山陰本線を利用して1時間程度、出雲空港（出雲縁結び空港）からは空港連絡バスと JR 西日本山陰本線を利用して1時間半程度の距離となります。

本市の主要な公共交通としては、民間路線バスの撤退を受け、平成12（2000）年4月より安来市・広瀬町・伯太町の1市2町で運行を開始した「イエローバス」があり、平成16（2004）年10月の合併後も、高齢者や児童・生徒を中心に、地域住民の生活を支える移動手段となっています。バスの路線は、イエローバスが安来市全域（安来中海沿岸地域・安来内陸地域、広瀬地域、伯太地域）を全5系統で運行しており、広瀬地域の比田は奥出雲交通（奥出雲町）の路線バス、伯太地域の井尻は鳥取県南部町のふれあいバスが市町を跨いで運行しています。

引用：安来市地域公共交通計画 令和4年3月 政策推進部地域振興課



図 1-5 安来の交通

オ 人口

本市の人口は、戦後5万5千人近くの水準で推移し、一旦減少しましたが、昭和40（1965）年から緩やかに増加し、直近のピークとなる昭和60（1985）年には、49,616人となりました。以降は、過疎化や少子高齢化の進行により人口は減少しており、市町村合併時の平成16（2004）年に45,030人だったものが、令和5（2023）年3月末では36,138人となっています。本市の将来展望を踏まえた「安来市人口ビジョン」の推計では、令和42（2060）年には総人口が30,442人になると見込まれています。

令和5（2023）年3月末の65歳以上の高齢者の割合は37.7%となっており、今後も全国同様、少子高齢化による総人口の減少が予想されます。

引用：安来市地域公共交通計画 令和4年3月 政策推進部地域振興課

グラフでみる統計やすぎ 令和3年12月 総務部総務課

安来市 HP 令和4年度人口統計表 市民生活部市民課

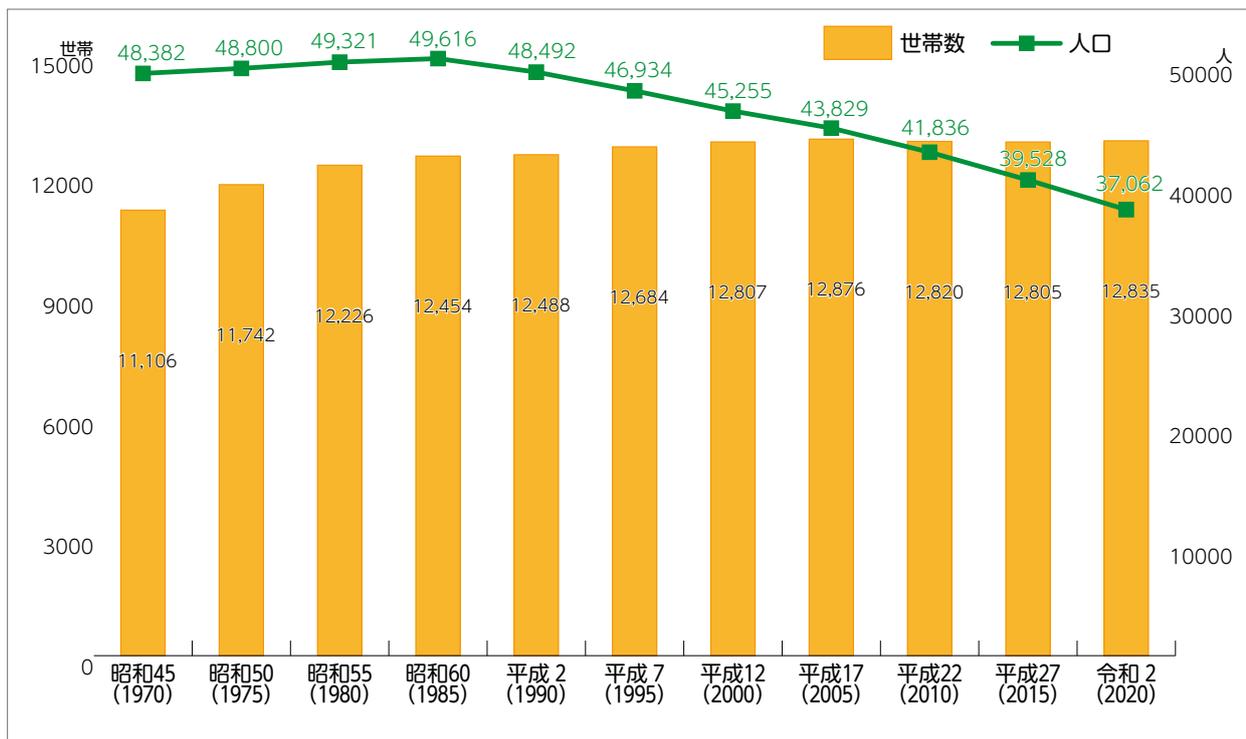


図 1-6 安来市の人口と世帯数の推移

引用：グラフでみる統計やすぎ 令和3年12月 総務部総務課

カ 特産品・名物

安来節

安来市に古くから伝わる民謡「安来節」。北陸など各地から荷を運び安来を訪れる船頭が唄う、おけさ節などの民謡や船歌などの影響を受けて誕生しました。安来節には陽気な中にももの悲しさもあり、土地の仕事や祭り、風習などを唄っています。唄・絃・鼓・踊・銭太鼓からなり、特に踊は、ざるを手にしてユーモラスな振り付けで踊る「どじょうすくい」の所作でお馴染みです。



図1-7 安来節

どじょう

どじょうは、江戸時代末期に松江藩が領内の産物をまとめた「出雲国産物名産」の魚類の項にも記録されているほど、昔から市民に親しみのある身近な食材です。

愛嬌のある風貌だけではなく、食せば栄養価も非常に高く、昔から「うなぎ一匹、どじょう一匹」(カルシウムはウナギの約9倍、ビタミンB₂はうなぎの約2倍)と言われるほどです。

また、安来市は全国屈指のどじょう養殖地で、生産量は全国2位を誇ります。生産者が丹精込めて独自のノウハウで短期育成した「やすぎどじょう」は、骨が柔らかく食べやすいのが特徴です。どじょう料理は唐揚げや柳川鍋、甘露煮など様々ですが、特にどじょうと一緒に島根県の山の幸をふんだんに入れてつくる「どじょうのけんちん汁」は人気の郷土料理です。

引用：安来市 HP、やすぎどじょう生産組合 HP、農林水産省 HP「ドジョウのけんちんじる」



図1-8 どじょう

島田たけのこ

安来市島田地区のたけのこは、200年余り前の文化年間に孟宗竹を導入したのが栽培の始まりです。地質などの条件に恵まれ、繊維質の柔らかい風味のある良質のものが生産されたことから栽培が拡大しました。

引用：安来市 HP、しまたたけのこ HP



図1-9 たけのこ

安来いちご

安来市は、県下有数のいちごの栽培地です。生産されるいちごは主に「^{あきひめ}章姫」と「^{べに}紅ほっぺ」という品種です。共に静岡生まれで今や各地で栽培される人気のブランド品種ですが、山陰特有の気候を活かしながら大切に育てられるいちごの味は全国でトップクラスとされています。

また、安来市の農家では、株ごとに出来の良い実を残し、他の実を間引く「摘果」という作業をしっかりと行います。とても手間のかかる作業ですが、そうすることで一つ一つに栄養が十分に行き届いた、甘く大粒ないちごを収穫することができます。

引用：しまね観光ナビ（公財島根県観光連盟）



図 1-10 安来いちご

広瀬緋（ひろせがすり）

広瀬緋は、文政7（1824）年、町医者の子・長岡貞子が米子町から染色の技術を学んで広瀬に持ち帰り、町内の女性たちに伝えたのが始まりとされています。大柄の絵文様を得意とし、複雑で精密な絵文様を正藍1色に濃淡を交えて、図柄がくっきりと浮かび上がる様に織るのが特徴です。倉吉緋、弓浜緋とともに山陰の三絵緋の一つとされており、昭和37（1962）年には県の無形文化財に指定されました。

引用：山陰ポータルサイト、島根県庁 HP「工芸品一覧」



図 1-11 広瀬緋

精進料理

市内清水町の古刹、瑞光山清水寺では、参拝客は境内の旅館と食事処で、精進料理を楽しめます。

精進料理は、仏教の教えに基づき、肉や魚などの動物性の食材を使わない植物性の料理で、四季折々の旬の食材を活かした健康食としても注目されています。穀類、野菜、豆類、果物などを中心とした滋味に富む料理は、彩り鮮やかで、器に美しく盛られて、見た目も楽しめます。



図 1-12 精進料理

また、清水羊羹は精進料理が起源とされる長い歴史を持つ和菓子で、寺周辺の4社が伝統の味を受け継ぎ、参拝客や市民に親しまれており、文化庁の「100年フード」に認定されています。

キ 安来市名誉市民

公共福祉の増進、産業・文化の進展、自治の発展に貢献し、その功績が卓絶で市民の尊敬の対象となる方に贈る称号です。

合併10周年の節目（平成26（2014）年10月4日）に、市民の代表で構成する選考審議会で審議を重ね、時を経ても輝きを失うことのない偉大な功績を遺した5人の方を選定しました。

米原雲海 明治2(1869)年8月22日生～大正14(1925)年3月25日没

明治2（1869）年、安来町新町の漁業木山家に生まれ、16歳で米原家の養子となりました。本名は幸太郎で雲海はその号。小学校卒業後、宮大工に弟子入りし建築彫刻を学びます。

明治23（1890）年に上京し木彫界の巨匠高村光雲の門に入ると、3年のうちに展覧会入賞を果たし、26（1893）年に帰郷してからも中央の彫刻展で入賞を重ねました。安来町松源寺山門の仁王像は、この頃に松江の荒川亀齋と共作したものです。

明治28（1895）年には東京美術学校に招かれ再び上京し、東京国立博物館に野外展示されている「ジェンナー像」の制作では、初めて西洋彫刻の技法「比例コンパス」を用い、木彫界に大きな発展をもたらしました。パリ万国博覧会入賞をはじめ数多の功績をあげる一方で、多くの門弟を輩出し、展覧会の審査員を務めるなど後進の育成にも注力しました。

明治41（1908）年には岡倉天心の知遇を得て日本彫刻会を結成し、伝統的な日本彫刻を基に東洋趣味を表現する作風を確立。大正期には松江城の松平直政公像、長野市善光寺の仁王像、明治神宮の獅子狛犬などの大作にも取り組みました。



図1-13 米原雲海

伊達源一郎 明治7(1874)年3月15日生～昭和36(1961)年7月15日没

明治7（1874）年、能義郡井尻村に生まれました。同志社大学政治科を卒業後、33（1900）年に上京し国民新聞に入社。45（1912）年に編集局長となります。

大正4（1915）年に国際通信社報道部長、次いで7（1918）年に読売新聞主筆に就任。日本全権随員としてパリ平和会議に参加した後、外務省嘱託として省内に情報部を創設しました。9（1920）年、東方通信社を設立すると、15（1926）年には国際通信社と合併し日本新聞連合を発足させ理事に就任します。昭和2（1927）年にジュネーブで開かれた国際新聞専門家会議では、日本代表として手腕を発揮しました。6（1931）年に国民新聞社長、翌年にはジャパントイズ社長を歴任し、日本の新聞界に多大な足跡を残しました。

戦後、21（1946）年に島根新聞社長に迎えられ、28（1953）年までの在任中、22（1947）年の第1回参議院議員選挙に当選。26（1951）年のサンフランシスコ講和会議では、吉田茂首相の要請により全権委員代理として各国記者団の対応にあたりました。

一方では青年育成の重要性を説き、大正5（1916）年には日本青年団の前身となる中央報徳会青年部を組織。井尻村の旧宅を地元の青年に開放し、戦後は公民館として寄贈するなど郷里へも貢献しています。

鳥類研究者としても著名であり、世界で収集した1600点以上の鳥類標本は、県立三瓶自然館に所蔵されています。

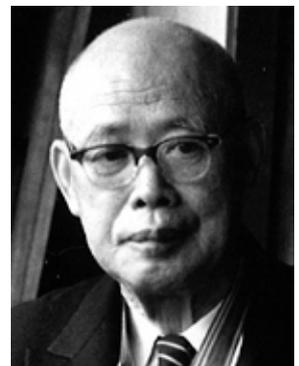


図1-14 伊達源一郎

初代 渡部お糸(本名・渡部イト) 明治9(1876)年11月6日生~昭和29(1954)年3月27日没

明治9(1876)年、安来町に生まれ、幼少の頃から安来節を習い覚え、成長するにつれて天性ともいべき美声に一段と磨きがかかり、お糸が唄う安来節は人々を魅了し、その名前は巷に知れ渡ります。

大正期に入り、各地での催しに出演し、ますますその名声を高めるとともにレコードの吹き込みも行い、安来節を全国に紹介しました。

そして、お糸を中心とした安来節一行は東京での一流寄席、また関西方面の寄席界にも巡業し、大盛況をあげるようになります。これにより東京、大阪には安来節専門の舞台が生まれるなど、その唄と踊りは日本の民謡界において大きな地位を確立し、出雲に安来節ありと全国に知らしめました。

また、巡業一座とともに各地を回り、安来節を広めるとともに当時の台湾、朝鮮、満州にも巡業の足を延ばすなど国内外において活躍し、一地方の民謡を格調高い日本を代表する民謡として位置付ける多大な貢献をしました。一方、聴衆のアドバイスをも取り入れて改良を加え、お糸節ともいわれる今日の正調安来節を生み出しています。

安来節保存会においても、初代家元の地位にあって正調安来節の宣伝普及と後継者の指導育成に努めるなど、その一生を安来節に捧げ、今日の隆盛の基盤づくりに努めました。



図1-15 初代 渡部お糸

河井寛次郎 明治23(1890)年8月24日生~昭和41(1966)年11月18日没

明治23(1890)年、安来町生まれ。島根県立第一中学校を卒業すると陶芸家を志し、東京高等工業学校に入学。窯業科学に関する基礎を学んだ後、京都市陶磁器試験場の技手を経て独立し、陶芸創作活動への道を歩みました。

大正9(1920)年、京都五条坂に「鐘溪窯」を開き、さらに研鑽を重ね、中国陶磁器等に関する新しい知見を加えて、青磁や辰砂、天目をはじめとする多彩で、しかも高い技術を駆使した作品を次々と発表し、作陶家としての地歩を固めます。

その後、李朝陶磁に見られるような無銘の生活陶器に強く心ひかれ、志を共にする仲間と民藝運動を展開し、従来の伝統様式を脱し、技巧を抑えた自然なつくりによって民藝の実践を試み、用と美の調和をはかった独自の陶芸を完成させました。そして、民藝にとらわれない自由な創作に入り、斬新で明るく、変化に富んだ作品を次々と世に送り出しました。

この間、多くの作品展を開催し、昭和12(1937)年のパリ万国博覧会、32(1957)年のミラノ・トリエンナーレ展ではグランプリを受賞するなど世界的にもその名を馳せました。

また、人間の表情を巧みに表した木彫作品などの多彩な造形は多くの人々を魅了し、多くの著書も残しています。

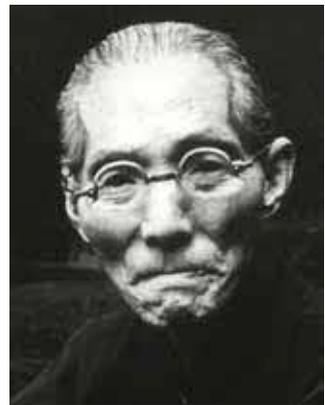


図1-16 河井寛次郎

櫻内義雄 明治45(1912)年5月8日生～平成15(2003)年7月5日没

広瀬町出身で商工大臣、農林大臣、大蔵大臣などを歴任した櫻内幸雄の次男として、明治45(1912)年に生まれました。慶応義塾大学経済学部を卒業後、会社員を経て応召。兵役免除後の昭和15(1940)年から父幸雄の秘書として政治家の道を歩みだします。

22(1947)年の衆議院議員選挙において、東京一区から34歳で初当選。その後、父幸雄の志を継ぎ、郷里島根県から立候補した参議院議員選挙で当選。次ぐ27(1952)年の衆議院議員選挙でも島根県から出馬し当選。以降、連続18回の当選を果たしました。

その間、池田内閣で通商産業大臣として初入閣し、佐藤内閣で通商産業大臣、田中内閣で農林大臣、福田内閣で建設大臣と国土庁長官、鈴木内閣で外務大臣等の要職を歴任したほか、平成2(1990)年には三権の長の一席である衆議院議長に就任。

一方、自由民主党の幹事長、政務調査会長、顧問等の重責に就任し、常に国政の中核にあって日本国発展のため尽力しました。さらにはスポーツ、文化、芸術分野においても幅広い要職を歴任し、その振興に寄与しました。



図1-17 櫻内義雄



図1-18 竹取翁(米原雲海作)



図1-19 三色碗(河井寛次郎作)



図1-20 民謡安来節

ク ご当地キャラクター

『あらエッサくん』 どじょうすくいをモチーフにしたキャラクター

合併前の安来市では、どじょうすくいのキャラクターを作り各種印刷物等に使用していましたが、これがキャラクター会社の人の目にとまり「とてもよいものですね」と太鼓判を押されたのをきっかけに、このキャラクターを全面に出した安来のイメージ戦略がスタートしました。

年齢：9歳（小学校三年生）

身長：120cm

体重：25kg

性格：天真爛漫（てんしんらんまん）、能天気、明朗快活、おっちょこちょい

特徴：いつも豆手ぬぐいのほっかむりをしているが、その下は丸刈り

趣味：遊び、昼寝

特技：どじょうすくい踊り（ドジョウの友達多数）

座右の銘：なんとかなるさ

関連：あらエッサくんと安来どじょうこ隊

引用：日本ご当地キャラクター協会 HP



図 1-21 あらエッサくん

ケ 市内の関連施設、遺跡

市北部の中海沿岸域には、安来駅から半径1km圏内に、市役所、和鋼博物館が位置しており、国道9号沿いには古代出雲王陵の丘、道の駅あらエッサなどがあります。また、月山富田城跡が立地している広瀬地域には安来市立歴史資料館や道の駅広瀬富田城、市役所広瀬庁舎などがあります。南部の山間部には、広瀬町布部地域に安来市加納美術館、伯太町赤屋地域に上の台緑の村があります。

引用：安来市地域公共交通計画 令和4年3月 政策推進部地域振興課



図 1-22 安来駅近郊の主な公共施設・関連施設



図 1-23 安来市内の主な公共施設・関連施設

(7) 和鋼博物館の概要

ア 設立の経緯

和鋼博物館は安来港西岸の地に、平成5（1993）年4月に開館しましたが、それまでには約半世紀におよぶ長い前史があります。それは、昭和15（1940）年、皇紀2600年事業として、安来の特殊鋼産業のルーツをたたら製鉄に求めて計画され、21（1946）年に開館した（株）日立製作所安来工場（現（株）プロテリアル 安来工場）付属の展示施設「和鋼記念館」です。たたら製鉄研究の先駆者依国一博士の指導のもと、旧たたら経営者にも協力を求めて、資料を収集・公開したもので、たたら製鉄に関心をもつ多くの人々の研究メッカとしての使命を果たしてきました。

その後、62（1987）年に、たたら製鉄に関する文化遺産を共有する安来市を含む6市町村は、現総務省の指定を受けて、「鉄の道文化圏」の形成に取組み、安来市では、和鋼記念館の重要有形民俗文化財250点を含む収蔵資料約15,000点の移管を受け、新たな構想のもと博物館の建設に着手し、平成5（1993）年に日本の伝統的製鉄法「たたら製鉄」に関する総合博物館として開館しました。

館内は、種々の和鋼製鉄用具の展示や映像、体験コーナーをとおして、たたら製鉄とその歴史・流通、さらに各種匠技を広く紹介するとともに、企画展や講演会、様々なイベントを開催しています。また、和鋼・たたらへの調査・研究に関する和鋼記念館の業績を引継ぎ、発展させることを目指しています。



図1-24 和鋼記念館

イ テーマであるたたら製鉄について

たたら製鉄という呼び方の始まりは、東京大学名誉教授で冶金学者の依国一博士が著書『古来の砂鉄製錬法』において、砂鉄を原料とする古来の砂鉄製錬法を「たたら吹製鉄法」と名付けたことによります。ここで依博士が指すたたら吹製鉄法とは、作業建屋の高殿内で、土製の製鉄炉に砂鉄と木炭を装入し、鞆で送風して鉄をつくる鉄生産の仕組みのことです。本書が用いるたたら製鉄という用語は、この考え方を基本としています。

前身である和鋼記念館以来、和鋼博物館がテーマとしているのは、このたたら製鉄であり、その取り扱う対象は、鉄生産の技術、製品、それを支える資源、設備、道具などを中心としています。

一方で、和鋼博物館設立の契機となる鉄の道文化圏推進協議会（後述）発足以来、現在の安来市、雲南市、奥出雲町は、この地に伝わるたたら製鉄に由来する遺跡、神話伝承、芸能などの有形無形の文化遺産を対象として、調査研究、資料保存、情報発信などを行い、文化的、観光的機能を持ちながら、特色ある地域づくりを進めています。

その中で、和鋼博物館には、安来市の産業考古館という位置付けがあり、たたら製鉄と深く関わりながら歩んできた安来市の歩みを伝えるという性格を色濃く持っています。

その後、鉄の道文化圏推進協議会の枠組みで取り組んでいる日本遺産「出雲國たたら風土記」では、たたら製鉄と、たたら製鉄から派生した信仰や芸能、景観、町並み、稲田などの要素を含めた、たたら製鉄の文化遺産をとらえて、「今もこの地では、神代の時代から先人たちが刻んできた鉄づくり千年の物語が終わることなく紡がれている」としています。

この考え方は、鉄の道文化圏設立以来の構想を踏襲し発展させたものです。日本遺産のゲートウェイ、そして文化観光という要素も求められる今、観光という面も重視し、2市1町が一体となって取組を進めています。

このような歩みを受けて、たたら製鉄をテーマとする和鋼博物館が取り扱う対象とするのは、たたら製鉄とそれを由来とする文化遺産です。技術という側面にとどまらず、たたら製鉄とは、この地域の特徴を伝える、個性豊かな、かけがえのない文化遺産であることを伝えていきます。

ウ 沿革と鉄の道文化圏推進協議会

鉄と神話を中心テーマとするリーディングプロジェクト「神話と鉄学の道」（昭和63(1988)～平成4(1992)年）。たたら文化が息づく鳥根県東部において、行政区域の枠をこえた広域的な取り組みで、昭和62(1987)年度に現総務省から指定を受け、共通のテーマに沿いながら各市町村が独自の物語性をもった「文化館」を建設しました（安来市は、平成5(1993)年に和鋼博物館を建設）。協議会は、鉄の文化館を拠点として、鉄の歴史・文化を調査・保存・公開し、それを通じて未来への新しい可能性を想像することをその趣旨としています。建設当初は、安来市、広瀬町、仁多町、横田町、大東町、吉田村の1市4町1村で構成され、現在は、市町村合併に伴い、安来市、雲南市、奥出雲町の2市1町で構成されています。日本遺産「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」の取り組みも、この協議会の枠組みで行っています。

引用：広報誌「やすぎ」平成2年 No.1164

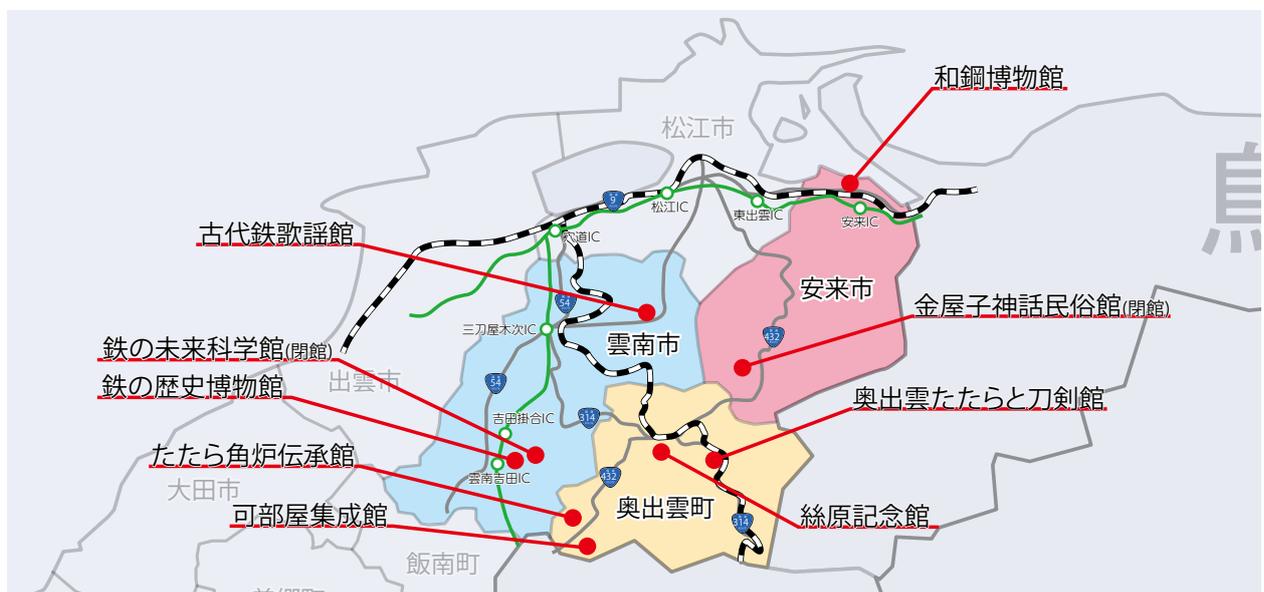


図 1-25 鉄の道文化圏MAP

エ 日本遺産「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」

平成28(2016)年4月、たたら製鉄が育んだ島根県出雲地域の文化遺産が、「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」として文化庁が選定する日本遺産に認定されました。

本市からは、鉄穴流しの手法により造成された水田「卜蔵新田」、鉄穴流しの土砂を使用して新田開発が行われた様子を残す「飯梨川と赤江の新田開発」、和鋼博物館が所蔵する国指定重要有形民俗文化財「たたら製鉄用具250点」、安来出身の画家松本春々のたたら絵巻「玉鋼縁起」、ハガネの町安来の歴史を物語る「安来港と安来の街並み」、港町の賑わいに花を添えた「民謡安来節」、たたら製鉄の神様が鎮座する「金屋子神社」そして「金屋子神社と西比田の町」、鉄生産地帯の統治拠点であった「富田城跡」が、構成文化財に選定されています。



ストーリーの概要

日本古来の鉄づくり「たたら製鉄」で繁栄した出雲の地では、今日もなお世界で唯一たたら製鉄の炎が燃え続けています。たたら製鉄は、優れた鉄の生産だけでなく、原材料砂鉄の採取跡地を広大な稲田に再生し、燃料の木炭山林を永続的に循環利用するという、人と自然とが共生する持続可能な産業として日本社会を支えてきました。また、鉄の流通は、全国各地の文物をもたらし、都のような華やかな地域文化をも育みました。

今も、この地は神代の時代から先人たちが刻んできた鉄づくり千年の物語が終わることなく紡がれています。



図 1-26 菅谷たたら山内



図 1-27 玉鋼製造(たたら吹き)



図 1-28 金屋子神社



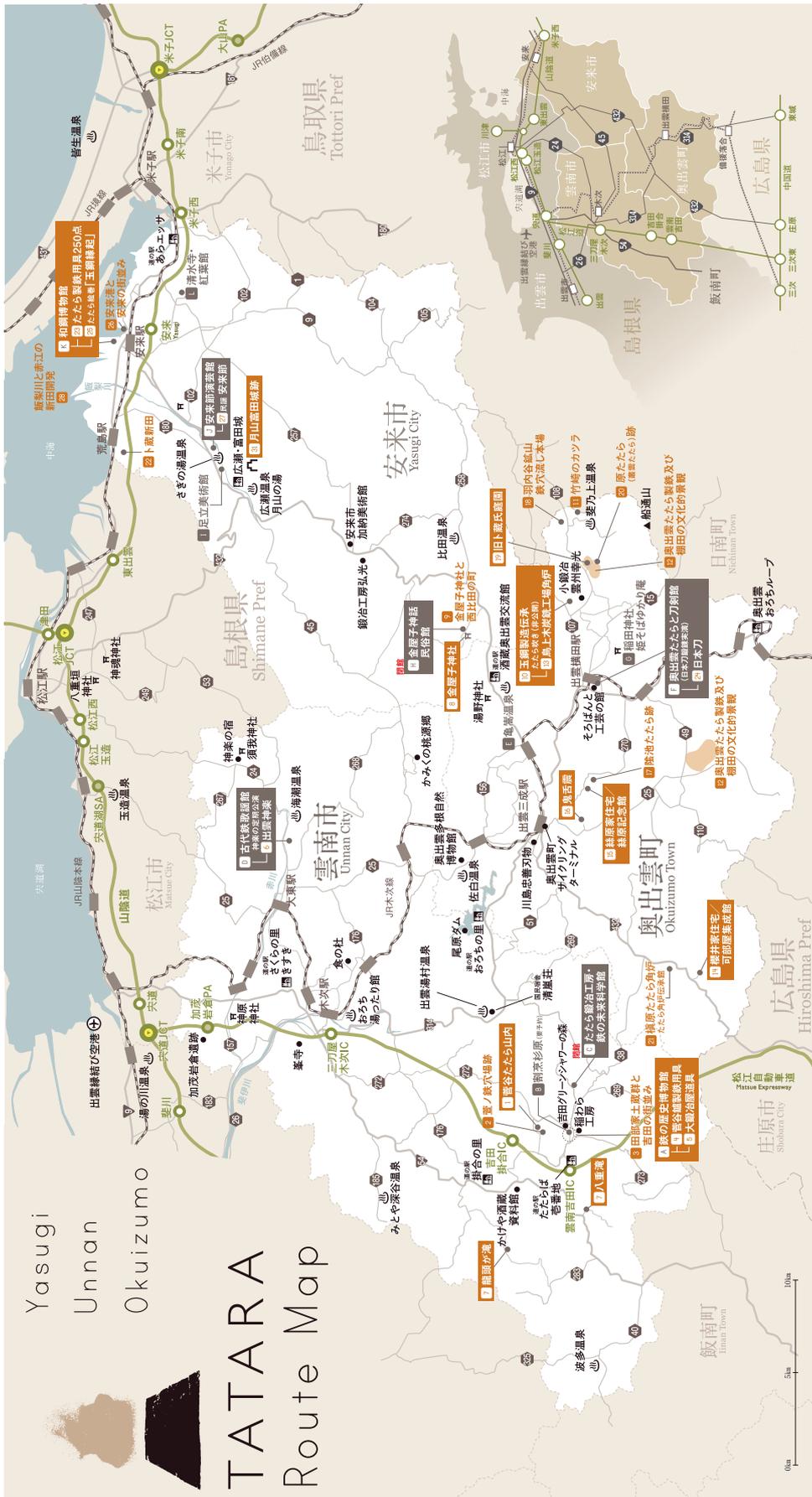
図 1-29 たたら製鉄用具 250 点



図 1-30 奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観



図 1-31 民謡安来節



- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-----------------|---|-------|---|-------------------|---|--------|---|-------|---|------|---|----------|---|-------|---|-----------------|----|----------------------|----|--------|----|-----------------------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-----|----|--------|----|---------|----|--------|----|---------|----|--------|----|------|----|-------------|----|-----|----|---------|----|---------|----|-------|----|-----------------|----|--------|----|-------|----|--------|
| 1 | 香合神社と
日田の町並み | 2 | 雲ノ尾六幡 | 3 | 田部家土蔵群と
日田の町並み | 4 | 香合織造用具 | 5 | 大瀬内運具 | 6 | 出雲神楽 | 7 | 龍胆がき、人草堂 | 8 | 金屋子神社 | 9 | 金屋子神社と
西比田の町 | 10 | 玉置製伝承(徳永)
たたら製鉄用具 | 11 | 竹崎のカツラ | 12 | 出雲たたら製鉄及び
備前の文化的景観 | 13 | 鳥居家住宅 | 14 | 鳥居家住宅 | 15 | 鳥居家住宅 | 16 | 鬼舌窟 | 17 | 熊池たたら跡 | 18 | 羽内倉山 山場 | 19 | 日土重氏家園 | 20 | 原たたら製鉄跡 | 21 | 熊池たたら跡 | 22 | 下瀬新田 | 23 | たたら製鉄用具250点 | 24 | 日本刀 | 25 | たたら製鉄用具 | 26 | 安来波と 津丸 | 27 | 無名安来節 | 28 | 新島川と赤江の
新田開拓 | 29 | 大倉吉ばやし | 30 | 竹崎十七夜 | 31 | 月山産田城跡 |
|---|-----------------|---|-------|---|-------------------|---|--------|---|-------|---|------|---|----------|---|-------|---|-----------------|----|----------------------|----|--------|----|-----------------------|----|-------|----|-------|----|-------|----|-----|----|--------|----|---------|----|--------|----|---------|----|--------|----|------|----|-------------|----|-----|----|---------|----|---------|----|-------|----|-----------------|----|--------|----|-------|----|--------|

図 1-32 日本遺産ガイドマップ